

ひなど調しつるをも、深く忍ひさせ給へり、彌生に鳥羽殿に御幸ありて、法皇に御對面おはします、かたみにやすけなき世の物うさを、御心ふかきさまに聞えかはさせ給へり、世の中わつらはしう思し召せり、人の物いひのさかにくきを、つゝましうおほさるゝ物から、御供にも、うどきいませさせ給はず、こゝろやすき限りにて、おほくもさふらはす、上達部五人殿上人三人などや有けん、殊にやつれさせ給へる御さま容はしも、あらまほしうめてたくて、年比にねひまさらせ給ひ、いと、なまめかしう見えさせ給ふ物を、ふかく思しみて、打志めらせ給へり、御けはひのたくひならねはしますを、法皇もいと哀にまほらせ給ひてり、故女院の御事をさへ思し召出させ給ひ、いみしうまほたれさせ給ふ、新院も此院の御有様の、ありし法住寺殿に引替て、いとかすかに、参り仕うまつる人さへたさくなく、つれくし行ひなどにて過させ給ひ、いつともなくむれいたくておましますを、限りなら哀に御らむし渡して、唯よいと泣せ給ふ、御供なる君達も聞えさせやらん方なく、みな袖のみまほり給ふ、新院のまほしもかくてねはしまさまほしう、出させ給はむ御心ちもせさせ給はねど、世の中を所せう思しは、かたて、なくく出させ給ふ、一院も今まほともえ聞えさせ給はず、御名残いかたみに盡せすおほし召にも、有つる法住寺殿にて、朝覲の行幸などの折の事、御賀のめてたかりし春の空をもおほし出させ給へり、唯夢の御心ちせられ給ひ、たとしへなき御住居を、耻かしうも悲しうも思しつゝ、けられて、御涙せきやらむかたなう、かきくらされ給へり、新院のやかて御船に奉り、御供の人々も淨衣などに改めて、いつくしまにおはしま

す、公に今年大嘗會もおこなはるゝとて、五月檢校の中納言も定めさせ給ふ、さりぬへきつかさく、またきに御まうけ仕うまつる、此比又入道のはからひ給ふよしにて、一院の八條坊門なる入道の家に御幸まします、高倉の宮と聞えさすり、一院の皇子にて、新院の御はらからに侍り、時にもあはせ給はず、つれくしと世をおほしまつみたるやうにて、過させ給へるに、源の頼政の、つねに心やすくつからまつりけり、すくれたる歌よみの數にも入たる人なれり、宮も春の朝秋の月のよなく、御前に召され、題給はせて、つからまつらせなとせさせ給ひ、物いひあはせ給ふにもつきなからず、めやすきものに御らむし置つれいなん、ひまなう召まつりさせ給へるに、頼政の一年三位して後、本意かなへるさまにて、程もなくつかさを返し奉り、かしらおろして、今の三位入道とか申しに、いかなりけるにか、世にはけしからぬ事を聞え出つるも、誠をらこといゑらす、いとむくつけう人々思ひたり、故爲義か子の行家といへるものを、宮の令旨の御使にて、國々に居ける源氏の兵を召つゝ、代を傾けん事を思しかまふるに、此頼政なむ、同じ心にはからひ申事あんなり、といふもまかくしきを、いつしか平家の人々聞付て、まつ宮をこと方に渡し奉らむとて、公に奏しつれい、すなはち事の定めあり、土佐の國に遷し奉るへきよしなり、皇子と聞えむいかたしけなしとて、俄に源氏になし奉り、御名も以仁を以光と改めて、仁の字をいとらせ給ふ、やかて檢非違使なる源の兼綱、大夫の尉源の光長、ゆゝしき武士姿なるものあまた具して、御迎に参りたり、宮にいはやうあらしめして、あらぬさまにやつさせ給ひ、夜にまきれて京を出させ給ひ、三井

寺に入給へり、公よりつかはし、御迎ひの兵に、宮に参りてかくといはすれど、宮におはしまさず、内に入て、物のくましくあざり求め奉れど、さらにおはしまさぬ、すへなくて、信連といへる宮の侍をからめて、ゐて参りたり、又山三井寺の大衆も、宮の御方人のよし聞ゆれり、内に山の座主、寺の僧綱達召れて、衆徒共せいし聞ゆへく仰言あり、源三位入道も同じ心なりけりといふ事も、かくれなうなりしかり、檢非違使参ると聞て、入道俄に子供打具し、五十餘騎にて、宮のねはします三井寺に参り給ふ、宮の法師原の心も、うしろめたくや思されけむ、まはしにて、寺をも出させ給ひ、奈良におはしまさむとするほど、まづ宇治におはしつきて、平等院に入らせ給ふ、内に八條なる入道の家に行幸ありて、内侍所をも渡し奉り、中宮も行啓なる、かゝれの中も、木のつから物さばかしきやうにて、殿原も淺ましう思す、公に平の重衡惟盛大將にて、むかひ給ふへき仰言あり、やかてこゝらの軍共をふたかへ、宮の御跡を追て、宇治に参り、河邊に陣し給ふ、三位入道待うけて、かたみに劣らしまけしといとみた、かひけるさま、いとみし、宮の御方に、召につかはし、國々の兵も、またのほりあへぬ程にて、御勢はつかなりけれり、終に打負て、三位入道の、子供もみな討れ、其身も平等院の釣殿にて、自害して失給ひぬ、宮を御馬に奉り、奈良の方に落し奉りにけるか、道の程にて、いみしき事侍りぬるこそ、淺ましう、宮もあへなうならせ給ひつれ、公の兵のいさみ悦ひたりしも、中々うたてかりしはや、さて後、さきにめしとられし信連も、流され侍り、又公かたの武士どもに、賞行はせ給へり、宗盛の御子の清宗も、此折加階し給

ひぬ、やうく世の中まつまりぬるやうなりしに暑き比はひ、都遷しとて、福原に内裏つくりて、京になし聞ゆへしとそ、入道のさためとて、めつらかなる事に人申あへり、古への帝のかはらせ給ふことに、都をも遷され侍れど、近き世に、絶て音にも聞えず、殊に桓武天皇のさはかりうるはしき御こゝろにて、萬代までも動きなきさまにと、思召置せ給へる御事を、わきて其流を傳へつる身として、ねほろけに、昔の御掟をもてたかへ給へる、入道の心を、人しもこそあれど、心あるとちいつまはしきせられて、淺ましと思へり、たかきもくたれるも、人々皆出たつとて、調度とも運ひ渡しなとする程、いひしらすらうかはしくて、心もえぬ京わらへともい、あきれまどひ泣かなしみつるさま、あはたしきまてなり、水無月二日、行幸とて都を出させ給ひ、寺江の行宮につかせ給ひ、又の日福原に入らせ給ふ、一院新院も同じやうに、御幸おはしまし、中宮の行啓もあり、かゝれり攝政殿より末、上達部殿上人五位六位などまで、心にもあらぬ家移りを、なへて此比のいとなみにいまけり、さるの難波の古ことも思ひ出られて、今の都とそなはりつるよと見るにも、さらに皇の都し給ふへきわたりともなく、所もいとせはくて、有つかぬ住居に侘あへる人々の、古き都のみ戀しう、すへなくおほいたり、入道の諸國の受領共して、大内裏のくらすへく思して、さりぬへきゆうそくの殿原辨史などに、いひあはせ給へり、人々定め聞えむとて見ありくに、ゆはひかならぬ所にて、二條三條などの大路も、ことく分ちかたなく、左京にまたからぬ、右京にすへてなしとあれり、さらりとて里内裏になりぬるに、それさへ打あはす、こととさきたるさまなり、入道天か

下を心にまかせ給へるあまり、都をさへ遷し給へるに、物狂はしきまでにて、國民のつかるゝ歎きの、かけても思ひやり給はず、はた此比のありつる頼政の亂れの、めざましかりしを思ひて、國々に有りける源氏の武士共をば、残りなう尋ねあさりて、失ひてんとおほいたるを、傳聞て、ほの心得るかたもや有けらし、うちくかまふる事わる人々も、遠き國々には有りど聞ゆるにそ、されのよと、やすからす下に歎く人も侍りとなむ、秋になりゆくまゝに、あたらしき都の有さまもたゝならず、賑はしうめてたかりぬへき事の露なくて、すゝろに物かなしう夕への空も、いと、身に入て覺え給ひつゝ、又住馴ぬ人々の心共に、何となうさうくしく、旅心地のみして、うらさひしき秋風の夕暮、初鴈の鳴わたる曉などのさらなり、生田の奥の鹿の聲にも、怪しう鱸の鱒思ひ出らるゝやうなるを、ことたかひて思すめり、月の比の、若き殿原いひあはせて、一葉の船に棹さしつゝ、近き浦々の月など見給ふもさすかにおかしうおほされき、實定の大將の、めつらしき所の月よりも、なれし古郷の忘れ難くて、内に御いとま聞え給ひ、忍ひてねはしたり、いつしか人々の住捨たりし都の、野らとなりて、虫のみ所えかほに鳴亂れたる、いと哀なり、猶残り居ける人の家とも、こゝかしこにあれど、人のけはひなどもせずかすかなり、いとほととならねど、いたく打荒にけることちして、見渡し給ふ賀茂河の流、八幡山の姿のみなむ、有しにかはらぬも哀にて、門前改めすとまつ覺え給ひ、ふりにし久邇の都にもなど、かへす返す思ひ出られ給ふ、大后の宮猶爰に残り居させ給へり、とふらひ聞え給ふ、さし入給へるまゝに、庭も籬も秋の千種の花のみさきみたれ、拂ふ

どもなき道の露の、誰ためにか白玉敷渡しつれと、ふみ分たる跡もなし、大宮人の移り居ぬれはと思すまゝに、深き逢のどとてそことしもなき、三の道をたどりつゝ、黄菊猶存と、忍ひやかに獨こちて、見めぐらし給ふ、人影もたえくゝに、物さひしけなる御有さまの、心苦しう思ひ出る事多くて、涙くまれ給へり、こなたにさふらふ小侍従の君の、容もこともなく心はせありて、歌などもゆへつきたるふし讀出て、人にも心にくきものと思はれける、大將もとより見はなたぬものにおほいて、時々かよひ給ひけり、今日もまつそなたに音信給ふ、女もめつらしう見奉りて、御前のありさまなど聞ゆ、大將此人して、御消息聞え給へり、宮こなたにとの給はず、やかてまいりて、御簾の前にさふらひ給ひ、日比の覺束なきなど聞え給ふ、宮もなつかしきに、昔今の御物語せさせ給へり、此宮と申し、世の人二代の後など申し御事にて、故公能の大臣の御女におはしまし、近衛の院の御時、内に參らせさせ給ひ、后に立せ給ひしかと、帝はやう隠れさせ給へりし後の、世をうき物に思し召れ、御行ひなどせさせ給ひしに、又二條の院の、わりなき御心にて、父大殿にもせちに聞えさせ給へり、遁れかたくおほいたるを、宮いと有ましうはつかしき事に思し召れて、御文などあるにも、御かへりたに奉らせ給はず、まいて參らせ給はん事の、けさやかに思したえつるを、帝あやにくに恨み侘させ給ひけるにそ、終に二度内にいらせ給ひにき、院に聞し召て、ことに例しもなく、めつらかなりとてむつからせ給ひ、上達部なども世の音聞もやさしからず、思ひなやみ給ひしに、上の唐土のためしをなむ引せ給ひ、人のいさめにもまたかはせ給はず、はゝかる方なき御もてなしに

て、もて出て后にすへ奉らせ給ひ、いみしう御思ひなりけるに、其帝さへなかくもおはしまさしりけれり、宮のかへすくも、人わらへなる世を、所せう物にもかなやと思し歎かせ給ひ、其後のうき世の事聞し召入へくもなく、ひたみちに御行ひかちにておはします、何れの帝の御時も、皇子の生れさせ給はさりしをなむ、宮人共も口おしき事にし侍りし、近衛の院の御時の、故頼長の大將の御子にならせ給ひて、参り給ひしをかし、されど誠の御筋の、徳大寺にねはすれり、大將の御兄にて、父の大殿失給ひしこなたの、たのもし人にて御後見つかうまつり給へり、大將の志はしさふらひて立給へるまゝに、小侍従の君のもとにとまり給ひぬ、かくわざとまうて給へるも、多くのこの人によりてなれり、淺からぬさまに語らひ給ふ、逢しあへはといふめる秋のよの、けにいととく明ぬる心地して、曉の別も常より身に入て覺え給へり、かたみに袖のみ露けて休はれ給へど、明果なむもはしたなくて、なくく出給へり、女もことにいみしき、朝けの姿を遙に見送りてたてり、大將もあかすのみたはいて、かへりみかちなるを、御供なる經尹、あはれに心くるしう見参らせけるか、立歸り女の打なかめてある所によりて、

物かはと君かいひけんことこの葉のけさしもなどか戀しかるらむ、これの大將の通ひ給ふ比、いつの時に小侍従、

待宵にふけゆく鐘の聲きけりあかぬわかれの鳥の物かひ、と讀たりけるを、思ひ出てなむきこえけるなめり、いみしうもつかうまつりけりとして、大將ことにはめ給へりしとを、大

將はた優なる歌人におはすれり、かうやうの事につけても、心とまりて、故郷の見すてかたさも、せん方なきまてなれど、御いとまの日數もあれり、心にもあらて、又今の京に歸り給ふ、若き君達のこよなき事にめてまどひ給ひし、須磨明石の月のなかめをいさし置て、はるくくと物淋しき淺茅生の陰をわけつゝ、いかてすむらんどいふはかりの、月をもてはやし給へる、大將の心深さを、たくひなふもおはしけりど、時の人やさしき方にいまつ聞え侍りしよ、都遷しの後の、大方の世長閑にもあらて、入道の心のおそろしさに、色にこそ出ぬ、やすけなう歎き渡りつゝ、神佛に仕ふる人々の、世の中なをりなん事を、起ふし祈り申のみなりし、此比大中臣爲定、伊勢に参りて、おほむ神の御前にて、君の御祈りつかうまつりけるか、月の比よみ侍りし、

月讀の神してらさは天雲のかゝる浮世も晴さらめや、源の頼朝とて、伊豆の國の流木なりしもの、平治に亡ひにける義朝の子なりしか、此ころ軍をねこして、其國の目代なる平の兼隆を討とりて、やかて伊豆の國をも出つゝ、日に添ていきはひ増りにけれり、いつしか關の東の國民をなひかせたりとて、福原に物の聞えあり、入道安からすおほいて、公に奏し給ひ、官軍をつかはして討しむへくをきて給ふ、少將惟盛三河守知度薩摩守忠度、をのく討手の使にて、平家の侍共、さらぬ軍もかすくは従へて、長月十日あま、あつまに下り給ふ、此亂によりて、關東の國々の貢物の、絶てもて参らぬを、ねはやけにもめさましうねはしめさるゝに、又世に富士のすそ野のわたりに戦ひありて、官軍うちまけつゝ、人々逃

て、伊勢の國に到れりと聞ゆるも、よに誠しうのあらしとおほゆれと、入道もいかならんと
い、さすがに思したり、討手人達の、富士河につきて陣すへ給へるに、源氏の軍をこはくなる
よしにて、そこの國々みな心をかはしけりと聞ゆれり、こなたいさのみ兵も多からぬり、
堪へくも見えず、いかにせましとためらふほどに、源氏の軍共、陣の後をふさかむとかまふ
るよし聞ゆるに、いよくうしろめたくて、けしきはかりの戦ひもなく、ある限り引退き
たり、霜月はしめ、大將軍なる惟盛の少將り、従ふ兵わつかにて、もとの京なる六波羅におは
しつきたる、こと人々もとりくりに逃てのはるとて、忠度知度貞俊忠綱などは、三河國にと
まじり、忠景の伊勢の國より京に入る、福原にの入道をはしめ、誰もくあさましうねた
き事限りなく、討手の人々をさへ、いふかひなしと心つきなう思ひきこえ給ふ、猶かくてや
むへきかはとて、又々さし加へてつかはすへきさためありて、頼盛の中納言教盛の宰相むか
ひ給ふなりと聞ゆれと、まづ清綱定安などの武士を、陸より下し給ひ、又筑紫の兵を、船にて
つかはすべく仰言ありきといへと、まめことにもあらぬにや、いそきたつとしもなく、たゆ
たふやうなり、山にの座主の僧正、東の仇共ほろひぬへき御所に、いみしき法行ひ給ふを、衆
徒のやくなしとろうして、をのくいひあはせつ、舊き都に還らせ給ふへく、公に訴へ申
めり、かやうのまされにや、大嘗會などの音もなくなりて、新嘗會も、どの京なる神祇官に
て行はれて、五節も例のさまなれと、東の亂れによるつ、しませ給ふとて、さのみはへ
く、しうもあらず、節會に參り給ふ殿原へおほくも侍らざりき、此いそき過つれり、又も

どの京に歸らせ給ふとて、上まつ御首途せさせ給ひ、土御門の大納言の家に入らせ給ふ、廿
三日やかてそこより行幸おはしまし、廿六日京に入らせ給ひ、五條洞院の殿を、内裏にて渡ら
せ給ふ、新院の日頃あつしうのみせさせ給ふとて、此折も御乳母の別當三位仕うまつり給
ひ、御車にて御幸おはします、やかて池殿とて、頼盛の中納言の家に入らせ給ふ、一院の御輿
にて、入道の家なる六波羅の泉殿に渡らせ給ふ、此御前の去年法住寺殿を出させ給ひし後
の、何所にてはれく、あからぬ、御住居に思し結はれてのみ、過させ給へる、人々哀に見
奉れと、入道の高倉の宮の御事をさへ、此御前のあらしめしたらむやうに、心つきなう思ひ
て、いよく心置奉り給へり、仕うまつる人もありしまゝにて、こと人のさらゆるし給は
すなむ、こたひの都遷し、山の訴へ東の亂れなどによりてなりと聞ゆれり、大衆のかひ有
て覺ゆるに、殿原さへ心ゆきたる事にて、急き渡り給ふ、平家の人々に残り給はず、みなか
へり給へり、たかきもくたれるも、住馴し古郷のなつかしさに、いどうれしき事にまけり、今
の長閑に春のいそきをこそなといへと、公にの東さまの事を、殿も大臣達もうしろめたう思
しやれり、新院も御心苦しう思し召れて、人々御前に召せ給ひ、さりぬへき祈の事など仰あ
はせ給ふ、官の廳にて、仁王會行はるゝとて、檢校行事をも定められ、又陣にの御守り怠るま
しう、衛府の人々にねはせ言あり、六波羅の入道も、さこそ心つよかり給へ、近江路のわたり
まで、軍れこりてみたりかはしきよし聞て、すへなく思せり、ひたふる心もすこしのなこみ
にけるにや、去年つかさどけぬる人々も、かつくもさされ給ふやうなり、前の關白大臣も、

京に歸り給ふへきせんし有て、召につかはしつれい、其方さまの人々いみしうよろこひ給ふ、花山の院のたはき大臣、北の政所の御親におはすれい、殊更に近きゆかりとて、去年のさはかれの折より、門もどちて引籠り居給へど、御かうしにいあらねい、關白殿歸らせ給ふと聞て、すなはち開かれき、殿の文書ともい、公の御さたにて、こなたにあつかり置給ひし、此ころ返し參らせ給へり、殿のうきにまつみ給ひし涙の川の、はやくもうれしき瀬になかれよりけりと思すも、中々夢のやうにてなむたとられ給ふ、めつらしう見奉る人々の、御容のことなるを、ほいなく口れしう思ひきこえ給ふ、法皇の新院にさへ御對面のたはやすからぬを、いふせう思し召るゝか、かたしけなしとて、ひとつ所にたはしますへう、入道聞え給ふを、いつ方にもよろこばせ給ひ、やかて新院のたはします池殿に渡らせ給ふ、仕うまつる人も、定能の宰相資時の少將など二三人、入道のゆるし給へりとて、參り加はり給ふ、法皇の前、關白殿の事をも、あらまほしううれしき事にせさせ給ひき、公にい、師走又左兵衛督知盛を討手使にて、驛の鈴賜はせ、近江路より駿河國にむかふへくさためさせ給ふ、近江の軍にい、山寺などの法師原心をかはしけりと聞ゆれい、平家の兵ともゆきむかひて、たちまちに法師原うちまけにしかり、淡路守清房三井寺の僧房ごとく、焼失ひて、金堂ばかり残りぬる事の哀に、こゝら年經つる御法の場の、時の間に春の野の心地し侍ること、世に淺ましうい見給ひつれ、京にい上達部受領などの人々に、兵を參らすへく仰言ありて、陣の守りも殊にきひしう、祭の折のさまにいあらず、衛府のつかさとも、うとましき夷のきぬにて、

夜晝つとさふらひて、くらうなれい、たそと咎むるも例の事なれど、思ひなしむくつけう侍りにし、かくて今年暮ぬめりどねほゆるに、又いみしう侍りし事い、六波羅の入道、御子の頭中將重衡を奈良の京につかはし給ひ、衆徒共の、高倉の宮にこゝろよせ奉りし怠りをどかめ給ふ、頭中將奈良坂にうち向ひ給ふに、大衆きひしうふせきて戦ひ、こはかりしかど、終に破られて、法師原山階寺に籠りしかり、やかて平家の兵とも火をさしつれいなむ、衆徒もせんかたなく逃まどひて、命を失ふもおほく、さしもいみしう造りみか、れし大佛も、烟のまよひにそこなはれ給へる、いと淺ましう、平家の人々の、後の世の罪も恐ろしう、三井寺の焼ぬるたにあるを、それい金堂の残りしをかし、爰い東大寺も興福寺も、御堂々々残りなくて、東大寺の御佛い、聖武の帝の御願にて作られたりし、其のちたはくの年を経て、またかゝる事いなかりしとよ、興福寺い淡海公の建給へりとて、藤氏の殿原殊にたふとみ給ひ、公にもねほろけならず思し置せ給へりしに、衆徒の心たさなさに、かゝることも有けりといいへど、さしあたりてい、平家の人々のよういなきに聞えなして、心あるも心なきも、世の中いはいあらんと、打なけきたり、まして藤氏の君達などい、やすからす下にいなやみ給ふめれど、入道のひたふる心のわつらはしさも知り給へい、こゝろに出ても給はぬさへ、いとれしうそはへりにし、年も歸りぬ、朔日にも藤氏の君達い、山階寺の焼ぬるによりて、こもたはしけれい、内に參り給ふ人も多からず、御節會もかたはかりにて、奈良の火事には、からせ給ひ、雅樂つかさめめさす、國栖の奏もなし、春の始の御儀式のうるはしからぬを、ゆゝしき事に

思ふ人も有となん、新院いぬる年より例ならずおはしまして、物なども御らんしいれず、臥かちに物せさせ給ふとて、中宮も御心苦しう見奉らせ給ひ、さまざまの御祈せさせ給ふ、去年の冬も禪善僧正仰言うけ給はり、東寺にて孔雀經の法行ひ給ひ、さらぬ所々にても験ある僧綱達、とりくりに仕うまつり給ふ事、絶間もなけれど、更にあるしもおはします、そこ苦しけにもせさせ給はねと、いといたうやせほそらせ給ひ、日にそへてよはらせ給ふやうにて、春に成ていよく頼みすくなく見えさせ給ふを、内にも宮にも思し歎く事限りなく、御修法などいさらにもいはず、神の社佛の御寺に、御祈の使ひまなく立させ給ふ、上達部上人達心をまとはして、つとさふらひ給ひ、見奉りあつかひ給ふさま、ねろかならず、中宮もそひてさふらはせ給ひ、よるひる御心をつくさせ給ふ、ちかう仕うまつる女房達も、見奉りなやみて、御薬何やかやとまめやかなれと、すへてかひなき御さまにて、睦月十四日、御けしきかはるとて、世中ゆすりみちたり、攝政殿左右の大臣こゝらの殿原、みな池殿につとひ参り給ふ、平家の君達も足を空にてまとい給ふ、山の座主何くれの僧達、心をおこして加持参りさばく、爰かしの御幣使御誦經の御使の、五位六位などい、寮の御馬にて走りまといつゝ、いみしけにのしりつるに、つひに其あるしなくて、春の雪にきそはせ給ふはかり、はかなう消入らせ給ひぬ、浅ましなどもいへいおろかにて、誠に照日の暮し心地に、院のうちの男女とよみて泣まといたり、中宮の思し入たる御さまもことばりなるに、一院の御心のうち、をしはかり奉るもかたしけなう、さらになとふへき方なうおはしまとひて、臥まるはせ

給ふ、皇子達の御中に、とりわけかなしうし奉らせ給ひしに、限りある御身ともにて、御對面などのたばやすからぬをさへ、いふせう堪かたき事にせさせ給ひ、近き比より同じ所におはしまし、覺東なごの御恨も残らず、かたみに御むねあきて、はかなしことをもまめ言をも、隔なう聞えかはさせ給ふるにこそ、いちはやき世のうれはしさも、すこしなくさせ給ひつれ、それさへ幾日もあらで、かく浅ましき御事を、さらにうつゝ共覺えさせ給はず、夢かどのみまとはれ給へり、同じ帝と聞ゆれと、御心はへの殊に有かたう物せさせ給ひ、民を育ませ給ふ御心のあまねさ、昔の聖の帝のためしに劣らせ給はず、山風の寒き夜、岸田舎の賤の住家をはるかにおほしめしやらせ給ひ、竈の烟の立そう朝の、國民の豊なるをよろこばせ給ひ、人をあはれませ給ふ御心ふかうおはしませい、男も女もつかうまつりよくて、萬代とのみ祈り聞えさせしに、思ひの外なる御事の、いとあへなく、御本性のあまりなるまで、なよひかにらうくしうおはしまして、入道の心のまゝにふるまひて、世の政などの打ほゆかむ事の多きを、つねに御心苦しう思しなやみて、下に歎かせ給ひけるに、一院の思はすなる御住居にくつしいたく詠侘させ給ひしを、御らむせしより、いとしう結ばれさせ給ひ、いみしき御物思ひのつもりぬるまゝに、いつとなく御病かちに、はれくゝ志からすおはしまし、事の、かたしけなき事と、御心あるとちの、限なう悲しう思ひ聞えけり、六にて東宮に立せ給ひ、八にて御位に即せ給ひ、廿年にて去年下居させ給へり、今年を廿一におはします、盛の御世を譲らせ給ひ、院と聞ゆるたに、あかす口おしう人々おもへりしに、いとあはたし

ういそかせ給へる御事を、かへすくわたらしう、末の代にのあまるはかりの御心のめてたさを、天か下こそりてたしみ奉らぬいなし、まいて年比なれつかうまつりし君達の、哀に心細うより所なくおほいためり、なくく清閑寺にゐて奉る、御送りの人々のいみしけなる物を上に着たるなり、口とも見るに目もくるゝわさにて、女房達の心おさめたるもなく、聲をも忍ひあへず泣たる、ことほりなりかし、御幸かなしきと、西行上人の言の葉も、さらに思ひ出らるゝ折に侍りしか、中宮にはめる御を奉るも、夢のこゝちせさせ給ふ、内のまた何事も思し召入れぬ御程の、うしろめたう思さるゝにつけても、こと御腹の宮々達、いとさなき御服すかたを、哀に御心くるしう思ひやり奉らせ給ふ、内も諒闇とおろしこめられて、上人なども、なへて曇らはしき椎柴の袖の春の色もなく、物あはれなり、此程三條の入道左の大臣、梅を折て實守の中納言のかりつかはし給ふとて、

いかてかゝうき世をあらて梅の花今年も同じ色にさくらん、花鳥の色音も、今年に徒に物うく詠め給ふ所おほくて、世の中かいしめたるさまなれと、國々に公にそむき奉り、軍をおこすよし、ひまなく京に聞ゆれり、平家の人々の、絶すさやうの方にかゝつらひ、入道もあつかならぬ世を思ひ侘て、一院をもはしたなくもてなし奉らむい、あしかりけりとおほいて、又有しにかはらす政をもいろはせ給ふへう啓し給へり、今年の二月二ありと聞ゆれり、春の日數おほく、人の心もわきてのとやかなるへきに、さはなくて、睦月より怪しうさうくしけなりし、後のささらきにい、六波羅の入道さへ、俄に病して失給ひき、六十四にいま

しけり、いみしき宿世ものまつる人にて、子むまこと、所せうさしならへて見る事い、さらにもいはす、中宮の御親にて、當代の祖父にいまし、上なき位をきはめ給ふのみか、后になつらふる御定めをやむことなく、世を心にまかせてまつりこち、露はかり心になはぬ事なく、帝いかはらせ給へど、いつれの御時にもは、かる方なうもてなし給ひ、たくひなき幸人なりといはれ給ひしかと、末の露もとの雫の、常なき風にいえ遁れ給はず、春の夜のはかなき夢に見なされ給へる、けに盛者必衰なども、今さらの事のやうにて、二位殿君達の明ぬ夜の闇にまどひ給へり、殊に東路越路なども、静かならぬに、又西の國南の海も、波風立さはきぬと告たりけれり、平家の人々、折しもあれ、世の中のやすからぬ歎きをさへどりあつめて、心苦しう思す事限りなし、今の宗盛を世の事をあたゝめ給ふとて、一院のはれくしからぬ御住居も、かたしけなしと見奉り給ふにや、法住寺に御幸なし奉れ給へり、猶殿原の、入道の忌の程もやすき空なく、弓箭の道に下立つゝ、法事をさへ過し給はて、重衡の關の東に打出給ふと聞えしかと、いかめしき戦ひ杯なくて、源氏逃ちりしかり、やかてのほり給ひし、勝得つとて兵共あたりかはにはこりありき侍しはや、中宮の霞の衣立かさねさせ給ひ、鶯の百囀りも聞いとほしう、御涙のつまに思し召る、何方にも花の盛さへ、すさましうけに墨染にもさかせまほしく、心とめてもてはやし給ふ人もなく、春の光の長閑なる折たに、まつ心なくちり行めるを、まいてあらまほしき風にまかせたるい、おしみとむへくもあらぬか哀にて、世の中の常なさにも、まつよそへられたり、邦綱の大納言も、病におもくなりて、つかさもか

へし奉り、かしらおろし給ひにし、やかてなくなり給ひしとを、是も平家に去たしうおはし
けれい、入道何事をも聞えあはせ給ひ、うちくゝの公の御後見のやうにおもむけ給へしか
なん、いみしき時の人にて、心はへあらまはしう、世の爲かひくゝしう物し給ひしとて、内に
も惜ませ給ふ、御女達の、故院の御乳母別當三位をはしめ、中宮内などの御乳母達にてさふ
らひ給へい、ことによせおもくこそ侍りつれ、かゝるにつけても、故院の御事を忘るゝよな
く、何れの殿原も戀忍ひ奉り給ふ、花の散を見て、誰とかや、

ちり残る花たにあるを君かなと此春はかりとまらざりけん、此後の撰集に、土御門の
内の大臣となむ侍るよしうけ給はりし、故院の御葬りのころ、御諡奉らせ給ひ、高倉院とな
む聞えさせ侍る、公にゆくゝの亂れのことなく治りぬへき御祈とて、所々にて、尊勝陀
羅尼、不動明王の御容など、書寫し奉るへう仰言ありしに、又人々の失行をさへ、物のさとし
にやと、ちり聞えさせ給ひ、さやうの御祈の爲にや、東大寺興福寺いそぎ造らすへう、宣旨下
させ給ひき、上の御位の後、年の號も改まるどて、去年師走さやうの御定め有と聞えしかと、
博士とも古きためしを考へ出て、御即位の同し年改させ給ふ事い、古き跡多くも侍らすと奏
しけるにを、まはし音もなく、今年文月、さきの御代の治承の止めて、養和になさせ給ふ、
こたひの文字い、敦周なん奉り侍りしとよ、年の號もかはりぬれい、ことなをりて天か下や
すらかならんと、國民とも喜ひあひつるに、いとゝしううれはしき事おほく、秋になりてい、
飯飢とか世に淺ましう、田子の刈積稻とはしくて、賤の住居の堪かたう侘しきいさらなり、

つかさある人々、名ある僧綱達たつきなくまどひて、つかれ臥つゝ、きし方ためしもなきま
てなるを、一院も攝政殿も御心苦しう、すへなく思し召れたり、冬の比、中宮も院號えさせ給
ひ、建禮門院と申き、齋宮も此御代にいまた居させ給はす、齋院も院の御服にておりさせ給
へり、いつちも御かはりなるへき、姫宮おはしまさぬなめり、内に御禊なども、去年ありぬ
へきを、都遷しの後、かしてにて御行ひかたきよし、人々申しかゝり、さてのひぬるに、今年院
の御事にて、又音もなくなりぬ、長月兵の亂れにより、御祈あるどて、遠き昔の跡を尋ねさせ
給ひ、伊勢のねはん神に、こかねの鎧を奉らせ給へる、御使の神祇のつかさなる定隆なりけ
る、伊勢に下りし道の程にて、あへなくなりしかり、こと人かゝりてなむ、神垣にい参り侍
る、京にい誰もくゝゆゝしき事におはいたるに、神無月日吉の社にても、同し祈とて、五壇
の法行はれ侍りにし、覺管法印を阿闍梨に召れしに、仕うまつりもはてす、俄に心地おこり
て、失給へりと聞ゆるも淺ましう、佛神のうけひかせ給はぬにやと、かたゝく心はそき世を、
殿も大臣達もいかならんと、うしろめたう思すめり、はやう東の討手使なりし知盛も、歸り
のほり給ひしかい、又陸奥の守越後の守などに宣旨下りて、東路越路の亂れ、まつむへうお
もむけさせ給ひしに、越後の守いかしてまりて従ひ奉れど、陸奥いいかありけん、覺東な
きやうなり、さらぬ所々、西の國南の海もみたりかはしうなりぬれい、平家にい人々こゝかし
この討手使に出立給ひ、むくつけき姿ともして、弓箭の道にのみたつさひつゝ、心のいとま
なけなり、いつしか年も暮なむとす、追讎の夜の、上の稚なうれはしませい、殿上人ふり鼓な

として参らするを、めつらしき事に興せさせ給ふ、書袴朱衣四隊行と、唐の歌にもいひ置し夜とて、雲の庭の御有さまの、日の光ばかりの火影明らか、なやらふ聲々も、一年の餘波を告わたれるにこそと聞ひ、さすがに哀れなりかし、次の年の、故院の御思ひの程にて、節會も行はれず、駿走もといめられて、睦月とて何のはへくしきもなく、院の御はてにてさへあれい、いと、物悲しう、宮の中かいしめりたるに、十七日大祓ありて、人々御服ぬきたりし、二月の六波羅の入道の一めぐりなり、女院のさまく、に御歎きの立歸りぬる心地せられ給ひ、今日も御祓のと思し召るゝにも、御袖のみまはれさせ給ふ、大宮人の花の衣にたちかへたるの、はななくしき春の色にて、さはいへど、都の中、長閑なるに、遠つ國の猶戦ひの聲絶すなど聞え侍る、義仲とて頼朝の同じ筋なりける、是も去年より北の國に起りて、いつしか勢ひ猛になれり、木曾路の方に忍ひて、年比ありしかり、とくさ刈麻衣の賤しきさまなりしも、日にそへて劍の光りかゝやきしより、後に大將軍など申侍り、京に國々の亂れぬるよしも、志はく聞えきにけれ、御祈何くれと、公にも志つ心なうたはさるゝやうなれど、風の音にのみ聞渡り、天飛鷹のはるかに思ひやるはどの、殿も大臣達も、さすがに世の大事ともれはいたらすれたしうて、近衛外の衛の守りもさのみにて、師走の比陣解つゝ、春のけはひの、例にかいらぬうらゝかけさに、すこしの心ゆるひもせられたり、たゞ平家の殿原を、たゆみなうあつかはしけにて、ついでよき國々の受領共に、はるはすへういひやりなどし給ふ、此人々も年比れさまりたる世にならひて、家の風吹つたへたる弓箭の道を、中々はる

かにのみ思ひつゝ、心にもいれず、高き雲の交りに、歌をも口とくいひなれ、糸竹の音をも身に入て翫ひ、ゆうなる方にすゝみて、武士めきおしきわさのありつかす、すへてらうくしうのみもてなして、司位などのまさらむ事を、ねかはしうし給ふれいなむ、とりくりにやむことなくなりのはりて、上達部殿上人いと多く、池の大納言門脇の中納言、知盛も新中納言と聞えさせ、参議にての經盛居給ふ、重衡も惟盛も三位中將になり給ひ、資盛清經も左の中將なり、宗盛の大納言の御子なる清宗の侍従と、通盛とい三位にや、又國々の守なるもあまたあり、此一そこの榮へ給ふる事、はしめにも申つれど、當代のうちく、のよせことなるものから、いと、時めかしう、目驚かるゝまてに侍り、此程なをよろこひ加へて、攝政殿、内大臣のかせ給ひし御かはりに、宗盛の大納言宣旨かうふり給ひ、内大臣になり給へり、一院の法住寺殿に還らせ給ひにし、こなたささくにかはらす、御幸も御心にまかせてあらまほしき御ありさまを、世の人めやすく見奉る、故院の御事につけても、いよく功德の方にすゝませ給ひ、御經供養など、絶す思しいとなませ給ふ、今年の釋迦如來の光り隠れ給ひてより、二千百卅五年にあたりとて、鶴の林の昔をはるかに仰て、法の會行ふ寺々もありきとを、卯月の事にや侍りけん、日吉の社にいみしき法の薙をのへけりと聞し召て、院の上御幸おはします、舞をもめてたう調へて、いと高きさまなれ、院も御涙といめかたうせさせ給ひける、此折やかて山にもはらせ給ひ、所々拜ませ給へる程、京にいかなるにか、けしからぬ事を聞え出て、山の大衆平家にそむきて、院の上を迎へ奉り、軍をおこし、今たゝいま

責來るなりとて、人々俄にあはてまどひたり、内に世に誠ならしと、殿もの給ひ、平家の君達も信しかたくはま給へど、さすかにうしろめたき方もありて、重衡の中將、兵どもをたかへ、御迎に参り給ひ、事のよし啓すれり、院驚かせ給ひ、いそぎ還らせ給ふ、かくて後、人の物いひの怪しきに、御幸も所せう思し召れにき、五月より年の號も又改まりて、壽永にそ成侍る、十月御禊ありて、十一月大嘗會行はせ給ふ、去年一昨年さはりありて、御位の後かく年を隔たるも多からず、昔の水無月比まてに御即位あれり、其同し年に行はるゝとか聞え侍き、悠紀の近江の國野洲郡なり、主基の丹波の國氷上郡とかや、御屏風の朝方の中納言伊經と二人してかき給へり、主基の神樂歌の、兼光の中納言のかうまつり給ふ、神南備山、

みしまゆふかたにとりかけ神南備の山のさか木をかさしにそする、同じ稻舂歌、長田の村、同じ中納言、

神代より今日の爲とや八束穗に長田のいねのまなひをむらん、此歌の元暦の折のよし、増鏡に見え侍るを、いふかしけに聞ゆる人侍れり、又こゝにも申なり、撰集に壽永とてな入侍るとぞ、次の春の、二月、法住寺殿に朝覲の行幸せさせ給ふ、院も久しう御覽せさりし程に、上のこよなうおよすけさせ給ひ、拜し奉り給へる御容の、めてたうゆゝ敷まてにねはしますを、うつくしう見奉らせ給ひ、故院の御事をさへ思し召出され給へり、事忌もしあへさせ給はぬ御けしきを、れとなしき上達部などい、いと哀に見奉り給へり、御贈物心ことにてあり、院司どもの加階など、故院の折のまゝなり、誠妙音院と聞えしおほき大臣の、物うかり

し事の折、御くしおろして、其後ゆるされて京に歸り給ひしかと、後世の事のひたふるに思ひはなれて、佛の道のみ行ひ給ひける、此比東山に妙音堂作りて供養し給ひける、院もいとめてたき事にせさせ給ひ、忍ひて御幸はしまし、さりぬへき庄をもよせさせ給へり、今年又内の大臣の、從一位にあかり給ひ、内大臣を返し奉り給ふ、御かはりの大臣に、實定の大將なり給ひぬ、此比都の外に、いよく亂れ増れりと聞ゆれり、卯月に、惟盛の中將をはしめ、平家の殿原、十萬の軍を帥て、義仲を討んとて、越路に向ひ給へり、去年も通盛の中將下り給ひしかと、はかしく、まからて歸り給ひにし、五月をなたさまに戦ひ始められりとして、大方都の中も静ならず、所々に幣使も立るめり、山々寺々にて、御祈かすゝに、つかうまつらせ給へり、越路よりの使ひまなう通ひ参るに、心ゆるひせらるゝ折もあり、又胸のふるゝ事もありて、京に居給ふ平家の殿原も、北の空を望みて、まづ心もなうおほいたり、はしめの官軍まさりぬるよし聞えしか、終にうちまけつとて、中將其外の人々、からうして歸りのはり給ふ、京出給ひし程に、雲霞と野山にたな引つる兵も、所々にて亡ひつゝ、残りぬるのいはつかなり、内にも聞し召驚く、大殿もいかにせましとさばかせ給ふ、宗盛などの平家の人々も、まはしのあきれ給ひけるか、さて打捨んやはとて、こたひの知盛の中納言重衡の中將資盛の中將貞能などをつかはし給はんとす、新中納言と三位中將の勢多より、左の中將と筑後の前司の、宇治路よりと定めて、文月廿一日、都を出給ふと聞ゆ、又山に使をやりて、衆徒ども公の御方に参るへく、さらし今より日吉の社を、藤氏の春日の社になとらへ、延暦

寺を山階寺のためしに、平家の氏の社氏寺になし聞えて、なかく尊ひ奉るべきよし、前の内大臣はしめ、平氏のむねとある人々、ひとつ心に名をつらねて、文こまやかに給へり、大衆もいなみかたなく、いかになどいひかはせど、義仲もねんころに聞ゆる事あれいなん、やかてそなたになひきて、京に返事も奉らず、義仲のそこはくの軍を従へ、いかめしきいさひにて、近江路より坂本に到り、大衆のあつるへするまゝに、山にのほりぬと聞えしかり、都の中いみしうさはかしうなりて、人々の唯物にあたりつゝ、あはてまどひたり、五條わたりに住はかりの、下か下なるもの共さへ、おそろしき事に思ひて、野山の末にも身を隠してんとて、悲しと思へる妻子などを引つれ、あるの老たる親をたすけて、あくかれさまよふ程、大略のさまもいとらうかはしく、俄に淺ましき世となりぬるをせん方なき、一院さへ忍ひて山に御幸あり、攝政殿又慕ひて參らせ給ふ、平家にいさり共と思ひし山の衆も、源氏に語らひとられぬるか心やましう、今の都に堪かたく見えければ、内をも院をも具し奉り、まはし福原にうつろひなんと思ひ立けるに、院のいつしか忍ひて出させ給ひしと聞ゆれば、いとはいなくて、行幸はかりを催し奉り、三種のおはん寶をもて奉り、玄上鈴鹿などの代々の御物、殿上の御椅子、時の簡、さらぬもかすくにとり具して、上も御車に奉り、何の御儀式もなく出させ給ふ、女院二位殿親族の殿原、みな行幸におくれしと、いそぎ給ふほど、いひまらすらうかはしく、唯今仇のよせ來らむやうに、女房れさなき人々の泣まどひたるも、あはたしけなり、大臣中納言達などい、うへをも、御子達をもいさなひ奉り給へど、さならぬいとめ

置給へるもあれい、見捨かたく出かてなるほど、いはん方なう哀なる事のみにて、一人心つきもおはさす、唯夢路にまどふ思ひにて、あれにもあらぬ御さまともなり、惟盛の中將い、とり分て心苦しうおほいたり、此北の方い、昔の成親の大納言の御女にて、おさなき程より見そめ給ひ、年比わく方なう、かたみに淺からず思ひかはして、君達もうつくしけなるもち奉り給へい、いよく哀なる契おろかならず、女君の父の大納言淺ましうて失給ひしこなたい、心ほそきやうなれど、男君のかひくしう物し給ふる、うしろやすくて、ひたすらに打頼み給へる、心はへもらうたければ、男君我身こそあれ、此人々をさへ、ゆくへなき波路の末に、たよはしなん事の、いとあたらしう、ひんなくて、とめ奉りつゝ、心にもあらて、ふり捨給へるを、女君のうらめしう、いかならん岩波の中にもと、またひ聞え給へり、中將ことばりに見聞え給ひ、さらぬ鏡のと、こしらへ給へど、我も心のみかきくらされて、出もやり給はず、兄弟の殿原、馬引立てそ、のかし奉り給へい、なくくかへり見かちにて出給ふ、經正の君い、年比なれつからまつりし名殘も忘れかたくて、仁和寺の宮に、御いとま聞えんとて詣給へり、人々都を出給へい、やかに家々に火をさして焼あけたり、保元よりこなた、廿年に餘りて、住なれし古郷も、今日を限りと覺ゆる心地共にい、いと深草とのみ思ひて、行もやられ給はず、忠度、

ふるさを焼野の原にかへり見て末もけふりの波路をそゆく、どの給ふを聞て、經盛、はかなしやぬし雲るに別るれと宿いけふりと立のはる哉、行盛の左馬頭の、都出るは

どあはた、しけれど、日比よみをき給へる歌どもを、定家の君の許につかはすとて、つゝみ紙に、

流れての名たにもとまれゆく水のあはれはかなく身の消ぬとも、後の代の撰集に入て侍るをい、いかになきかけも、本意ありてうれしうこそ見給はめと、いとあはれになん、又忠度の、歌の道に心さし深くて、常に大后の宮の大夫の御許に参り給ひけるか、今年二月、此大夫の君に、院の仰言ありて、撰集の事侍りしかり、かゝる折もまつまうて、さりぬへきもさふらは、撰ひあつめさせ給ふ中にも加へ給ひてよとて、讀置給へる歌を一巻さし置つゝ、いとま聞えて出給へる、いとゆうにも侍るかし、さてなん集にいられ侍りしかと、此人々の公の御かしてまりなれんとて、名をあらはにいひて、讀人志らすとて侍る、故郷の花といふことを、

さゝなみや志賀の都のあれにしをむかしなからの山さくら哉、集の千載集とて、文治の頃奏覽の侍りしをかし、かうとりくにいそき出給ひけるに、池の大納言はかりの、京に残り給ひき、東よりかねて頼朝の聞えおこせつる事有とて、又平氏ならぬの、上達部殿上人大臣達まで、行幸にも仕うまつり給はず、皆と、まり給へ、院の上山におはしますと聞て、引つれ参り給へり、かくあはた、しかりし、文月廿五日なりける、廿八日に、院の上都に還らせ給ふ、今日の上達部殿上人、よそはしう引つくるひて仕うまつり給ふ、義仲行家などの源氏の武士も、夷の衣なれと、いとうるはしう花やかにて、六萬騎の兵をまたかへ、御前つか

うまつれるもめつらかに、よのつねにてい、うたても有ぬへきを、かうやうの折の、中々頼もしう、つきくまかりし、いとせ都遷しなど、ことやうなる入道の心より、あいなき世のさはかれにて、行幸御幸といそき立つゝ、かしてき帝の、萬代をかねてトをかせ給ひし都をしも、荒しはてんとし給ひしことを、いく程なくて、かく思ひかけぬこと、出まうて來へきあるしに、有けれど、内女院などの、あさましうはるくとおはしましける事を、かたしけなく、世の人思ひ奉れり、平家の福原にもあり經かたくて、遙なる筑紫路に行幸なし奉れたり、京に一院政をまためさせ給ふとて、平家の人々の、司位をとらせ給ひ、上人の殿上の御簡けつらる、時忠の大納言はかりの、もとのまゝなり、又その人々のあるよしをける所々をい、源氏の武士どもに給はらんとし召れき、八月院の殿上にて、除目の事ありて、賞行はせ給ふ、義仲を左馬の頭にて、伊豫の國を給はり、行家備前の守とて、此程前の中納言師家の君、大納言になり給ふ、是の基房の大臣の御子にて、父大殿一年清盛入道のはからふむねにて、妙音院の大臣同しこと流され給ひける、又の年のゆるされて歸り給ひ、此殿のまはし嵯峨におはしまし、今の五條の殿に住給ふ、院に罪なくてあつみ給ひし事を、よととも御心苦しう思し渡らせ給へ、立歸り公の御後見にもと思し召るれと、うかりし折、さまをも替給ひてしかり、口おしう本意なく思されけるに、御子のきひなるにつけさせ給ひ、むつましき御心見えさせ給へるなるへし、此大納言、治承三年十月とし八にて正三位中納言に成給へる、世にためしも有かたう、人も淺ましきまてに見聞え侍りしに、いく日もあらて、父の殿同

し日、つかさどられ給ひ、其後ゆるされ給へど、またつかさなどもなかりしに、今年十二にて、大納言と聞ゆ、是はたおほろけならず、目もあやにて、入道殿もおもたしう、よろこひかしてまり給へり、唯今大將とていましけるの、實定の内の大臣、右の大殿の御子なる良通の中納言をか、院の上、帝のよしなきゆかりにひかれさせ給ひ、思ひかけす都を出させおはしまして、鄙の長路にさすらへさせ給へるを、御心苦しう思し召れつゝ、時忠の大納言の許に仰言ありて、還御の儀を催させ給へど、平家またかひ奉らざりけれり、口おしう思し召れて、皇子の中、何れにまれ、殊更にすへ奉りなんと、思し召らせ給ひ、攝政殿其外の殿原、みな御前に召れて、御定め侍り、古へより下居の帝、ことに御くしなどおろさせ給ひて後、御卜何くれの公事、伊勢の幣使の御定めなどの、例なき事とて、此度やはしめならんと、世に申あひ侍り、人々御位の何方にかはと、とりくくに啓してさためかね給ふ、昔の高倉の宮の御子も、れどなしうならせ給ひておはします、又故院の宮達も、いとけなき御ほどなれど、すきくうつくしうておはしませり、人々おもひなやみ給ひ、院も釣する蟹のうけめきて思したる、ことばりの御事になむ、さるの先帝、西の國に行幸ありて後、廿日にあまりて、都に日嗣の君おはします、たからの位むなしき事のかたしけなく、天照神の御らむせん所も恐れあり、まいて劔璽などもおはしませぬ、院もいと、御心ほそ、かたくに思し侘させ給ふ、さてやませ給ふへきならぬ、終に高倉の院の四の宮、四にならせ給へる、御位に即せ給ふへく、おもむけさせ給ふ、さりとぬへき御宿世やおはしませけん、三の宮をもさし越させ給ひ、かく

定ませ給へる御事の、いみじさをたくひなう侍り、攝政もかはり給はす、天か下の院の上御心にまかせおはします、都の御守りの、義仲仕うまつりけり、はしめいしるやすく、まめやかなるさまなりけれり、院も御心落居て思し召れ、都の中も静にて、上下の人々よるこひけるか、もとよりさる片田舎に生立し者なりけれり、ひたふるの衷心にて、かたくなしき事のみなりしか、はての院のおはします法住寺殿に参り、いといたくみたりかはしきふるまひ共をしつゝ、やむことなき御方々の、そこなはれさせ給へるもかたしけなく、上人北面の侍共などの、數もなう失はれけり、御殿に火をさへさして、むくつけき事いふ限りなし、院もかろうして忍びて出させ給ひ、入道殿の妙音堂に渡らせ給ふ、上の御母君の七條に行幸させ給へり、攝政殿の宇治より奈良の方に行せ給ふ、平家の人々のあくかれ出し折にも、やゝ立増りたるらうかはし、この、めつらかなるまてに侍り、頼朝の傳へ聞て、いとたいくしき事なりと、めさましう思ひけり、此人の前の兵衛佐なりし、十月よりつかさ位、もとのまゝなりき、はやう鎌倉の里といふ所に、家居して住けり、やかて弟なる範頼義経などを、都にのほらせて、義仲か、なめき怠りを咎めてんとすめり、京に、政も義仲心に任せぬるやうにて、見苦しうかたはなる事多かりし、殿をも攝政と、め奉り、かはりに、師家の大納言の、無下にわかうおはするをなし奉り、大臣になしあけ参らせんとすれど、たゝ今けちもなけれり、内の大臣の服にて、おはしとけ給へるほど、攝政殿に内大臣の宣旨下れり、節會も行はれず、更に例もなくかたはらいたき事、義仲申行ひ侍りとと、明る春の、義仲征夷大將軍にさへな

れり、攝政殿の御父入道殿の、義仲に睦まじうおはして、政をもちく口入給ふれいなん、世の人の参りつかうまつるさま、いにしへにかはらす、いきをひ有て物し給へり、内に御即位も去年の音なくて、今年行はるゝなりと聞え侍る、睦月の廿日はかり、東より範頼義経、そこはくの軍を志たかへて、都に入しかり、義仲堪すなりて、兵共ことく討れ、その身も粟津野のわたりにてほろひにけり、誠平家の筑紫にも有ひて、讃岐の國に遷るひ、八島に宮作りしてありけるか、今年春のはしめ、又福原までのはりて、津の國一の谷に城をかまへ、所せう兵をこめおきつゝ、須磨の浦より生田の森かけて、夜晝守り怠らす、きひしうをきてたり、去年より所々にて折々戦ひありしかと、源氏いとかひなく打まけぬるやうなりしか、平家の人々いみしうよろこひて、すこしこころやすく、つよくしうおほいたりして、今年も院の仰ことにて、都より範頼義経、討手使にて向ひにけれり、つゝにそこをも落されて、先帝女院御船に奉り、大臣中納言達、船にて海つらにたゝよひ給ふ、殿原多く討れ給ひ、そこはくの軍失はれて、數すくな成ぬ、忠度も討れ給ひ、重衡のからめられて、京にゐて來れりと聞えしかり、古へ女院に宮仕へしてありける、右京の大夫の君、

またまぬ此世の中に身をかへて何心地して明暮すらむ、この人の年比、資盛の中將淺からすかたらひ給へりとして、平家の人々わきてむつまじう思ひ置つゝ、そのよゝ重衡後の宮の亮にて居給ひて、草のゆかりをい何かの同し事とやは見ぬ、なとたのふれこち給ひし折、女

ぬれそめし袖たにあるを同し野の露をいさのみいかゝわくへき、ありしにかはる有さまを、いと哀に思ひやり聞えしとと、重衡をい東にゐて行しかと、東大寺焼ける人として、奈良の大衆申給はり、そなたにてうしなはれ給へり、惟盛の中將の、忍ひて高野熊野などにまうて給ひ、那智の海に身を投給ふるの、けに生田の川もかひなく、其わたりの軍の破れぬる折、こゝらの人々なくなりて、世の中たのみすくなさまゝに、今はと思ひ果給へることを哀なれ、京にも物の聞えありて、右京の大夫、

悲しくもかゝるうき目を三熊野のうらはのなみに身を沈めける、清經の中將も、同しはらから成ける、それも去年西の海にて、柳か浦とかやいふわたりにしつみ入給へりとして、落とまる平家の人々の、須磨の波風のあらましかりしうち、又八島に御船こきよせて、上をもあはしはれさせたり、京の事も折々はのかに聞えて、文月御即位もありきといふをい、さすかに御心うこきて、女院などの哀に思し召るへし、秋になり行海つらひ、朝霧さへ立へたてゝ、いと、故郷の方の、遙に初鴈のこゑ待出ても、新玉章の言傳も覺束なく、まいて無の數をふ世の、心はそさもせん方なく、人々同し所にたにあらて、かたへの立別れつゝ、仇となりなど、たえず心つかひせらるゝさへ、うればしう打歎かれ給ふ、行盛の左馬頭、備前の道をかため給ふと聞えけれり、過にし年の經正忠度などもろ共に居給ひしを、今年いかに心ほそく哀ならんと思ひやりて、全性大徳、消息聞ゆるとて、

ひとりのみ波間に舍る月を見てむかしのともやおもかけにたつ、とあるを見て、こなた

もわすれかたうし給ふ事にて、返しに、
諸共に見し世の人波の上に面かけうかふ月をかなしき、忠快といへる聖の、教盛の御
子にいますかし、有つる一の谷の亂れに、兄弟の君達一時に失給ひしを、歎きわたり給ふ程、
左馬の頭おそくとふらひ給へりけれり、
憂身をい事とはすともかゝる世のかなしき事あるやしらすや、といひやり給へるに、
行盛、

悲しさを餘所の歎きと思はねの人をどふへき心地たにせず、都にの年の號も、壽永三年
はどいめて、元曆に改まり、上の御位の、文月官の廳にて即せ給ふ、攝政も義仲うたれし後、
基通の大臣立かへり任ふまつり給ひ、師家の大臣も攝政も退給ひ、もとの大納言にや、大骨
會も同し年行いせ給ふ、三種の神寶おはしまさて、日嗣に備はらせ給へる御事の、昔よりま
たなき事にて、院も思しなやませ給ふやうなりしかと、御位の後、都の中ものどやかに、義仲
か亂れもとみにまのつまり、雲の上も昔にかはらぬ御有さまにて、上達部上人うしろやすくつ
かうまつれるを、御らむするにも、御心ちあゝせ給ひ、天照神の御慮にも、かなはせ給へる
事にやと、うれしう思し召れき、平家さへ次第に勢ひ衰へぬるやうにて、失はるゝ人たはし、
須磨の浦波の立さはきし折、討れし人々の首ども、京に參らせつるを、大略の樹にかけら
れ侍りしとよ、鎌倉の頼朝も、四位の加階賜はり、義經の五位にて、使の宣旨かうふり、左衛
門の尉と聞えし、範頼の三河の守にや、又の年も平家討へう仰言ありて、源氏の兵共、京を出

つゝ南の海に到りしかり、平家の八島をも出て、船の中に日數を送りにけるか、彌生の末、つ
ゝに長門の國文司の關のわたりにて、戦ひの有けるに打負て、先帝も大海の波に立ましらせ
給ひ、二位殿知盛の中納言、資盛の中將、其外の人々、みな底のみるめの物むつかしさもい
はて、一つ心にふかう思ひまつみ給へる程、いみしなど聞えんも、中々に侍る、宗盛の大臣
御子の右衛門督、時忠の大納言のいけとられ給ふ、神靈も海に入らせ給ひしかと、浮ひ出さ
せ給ひしかり、源氏の兵とりわけ奉る、寶劔のあからせ給はずと聞え侍る、女院も同じ流
れの水屑と、思し入らせ給へるを、源氏の方に見付奉り、とかくして船に移し參らせたり、平
家ことごとく亡ひにけれり、源氏の大將達、急ぎ歸り登るとて、御鏡神靈二種のおはん寶、女
院をも具し奉り、いけとりの人々ひきて、卯月都に參りたり、公にの何事よりも、御寶のこと
なくて還らせ給へるを、いみしうよろこばせ給ふ、宗盛清宗などの京に入給ふ日、物見る
人そこら所もなうつとひ侍り、やかて鎌倉にゐて行しに、又のほり給へる道のはとにて、二
人なから失はれ給へり、御寶のまつ鳥羽殿に渡し奉り、内より上達部殿上人引つらねて、御
迎ひに參り給ひ、いとよほしく、源左衛門尉も御前仕うまつり、まつ官の廳に入らせ給ひ、
そこより温明殿に渡らせ給ふ、上も大内に行幸はしまし、三日かはと御神樂侍りとと、公
にの又時忠の大納言、其外も平氏なる大徳達など、國々に流しつかはさる、大納言能登の國、
御子の内藏頭信基の備後の國、忠快法印の伊豆の國とか、とろくに別れて、遙々とおはすな
りけり、忠快大徳、都を出給へる比、おそくとふらひたりし人の許に、

身のうさか人のつらさかさりともおもふ日敷をといて過ぬる、全真僧都の筑紫に遷され給ひける、程へて召返されてのゆり給ひ、女院の大原におはしましけるとふらひ奉りて、御物語聞えさせつゝ、昔の事まづ、に思ひ出られて、涙もどいめかたけれり、
 今もかくてめくりあふにも悲しき此世へたてしわかれなりけり、と啓し給へり、僧都の故入道の弟におはすれり、はなれ奉らぬ御事にて、まつと此御前にも参り給ふなめり、女院の御心にもあらで、なからへさせ給ひ、京に歸らせ給ひても、有しに替る事のみにて、故郷としも思されず、中々うわしくしう、世の中はしたなき御心地せられ給ひける、まはし吉田といへる所に、忍ひておはしまし、かど、後に大原の奥なる、寂光院に入せ給ひ、御くしおろして、静に行はせ給ふ、先帝の浅ましかりし御宿世と、物うく悲しき事におはいて、後の世の闇路のひかりなるはかり、まめやかに佛の道をのみなむ、ねかはせ給ひ、まきるゝ方なく、つとめさせ給へる、いと尊とき御さまに侍り、さふらふ人とても、大納言の局阿波の内侍などはかりにて、松風の音物さひしく、櫛の烟幽なる御住居なれど、後に昔の心よせなる人も、とふらひ参り、一院さへをとつれ聞えさせ給へり、公に御實の事なくて還らせ給へる折、其賞とて、頼朝を二位になさせ給ふ、義経の伊豫の守にて都にさふらひ、内の御守つかうまつれり、又平家の領したりし國共、三十にあまりて侍りけるを、源氏の武士共にも賜はせ、さるへき所々の上達部などにもわかち給はせけり、院の上いささくにかはらす、世の政をまたいめさせ給ふとて、先帝の口おしかりし御事を、かたしけなく思し召れて、文治三年と

か申侍る比、公の御さたにて御謚奉らせ給ひ、安徳天皇となむ聞えさせ侍りし、天か下の君にて、わつかに三年おはしまし、六つにならせ給ふ秋、都を出させ給ひ、八つにて浅ましき御事に侍りし、其世に聞傳ふる人々、唯はかなき夢のやうになん思ひ奉りし、はや、かくて都の中い、むかしにかはらす時めきて、二度加茂川の水澄る御代とそなり侍る、さてなむ増鏡にも、おどろか下もふみ分てなど聞えけるも、此御時に侍るかし、

さきくも聞えし紫式部の六十帖の草子の葉月望より書はしめ給ふときしに今の其夜し
も筆をとめ侍ることもやうかはりつれとさりぬへき事とれもふなむれこかましかりき名
をいはいはむとれもひわつらふたるに月を見るく人の月のゆくへなどこそいはめと
聞え給ふにいとうれしうまことにいみしき名なりとゆへありてははえぬさりし月も七夕祭
る日より手習はしめしを思ひてこの月も又七日に筆をとり侍る三卷にて今日名におふ月の
夜なむみちぬる事もさすかにはなれぬゆへもこそとれもふさへいとおほけなしや
あくかるゝ心のはてり千さともかきらぬつきのゆくへを思ふ

月の行方の荒木田麗女か三鏡の中間高倉安徳二帝の御世のみ女文のかけてなきをな
けきて書けるなりといへり今御巫清直氏の文化十四年丁丑九月秦光基寫とある本を
小杉榎郵氏再寫し遺けるを底本となして再訂せり

明治三十五年十月三校了

近藤圭造
近藤瓶城識

（史ノ第二册奥付）
 近藤圭造
 近藤瓶城
 近藤圭造
 近藤瓶城

明治三十三年五月二十二日印刷

（史ノ第二册奥付）

明治三十三年五月二十七日發行

同三十九年三月十五日再版印刷發行

編輯者 近藤瓶城
東京市小石川區指ヶ谷町七番地

發行兼印刷者 近藤圭造
東京市牛込區赤城下町七十一番地

發行所 近藤出版部
東京市牛込區赤城下町七十一番地

同治二十六年
佛前
...



